

転生したら 幼女

神様、聞いてないよ〜!

でした
!?



🐾 テト 🐾

大鎌を使いこなす神獣、死神。
穏やかな性格で、料理好き。

「人の姿」
🐾 ステイシー 🐾

シュヴァルツエンペラーヴォルフという黒狼。
神獣ながらオーナーを務める宿屋は、
世界中で大人気。

「神獣の姿」
🐾 ステイシー 🐾

🐾 セス 🐾

ステイブの蜘蛛の部分が
人化した姿。
無口かつ無表情だけど、情に厚い。

🐾 スティーブ 🐾

裁縫に長けた神獣、アラクネ。
キャスリンという名を自称する、
明るくてお茶目なお姉さん(?)。

🐾 ステラ 🐾

女神様のミスで幼女に
なってしまった元OL。
異世界では、浄化も戦闘も
バリバリこなす。

🐾 バトラー 🐾

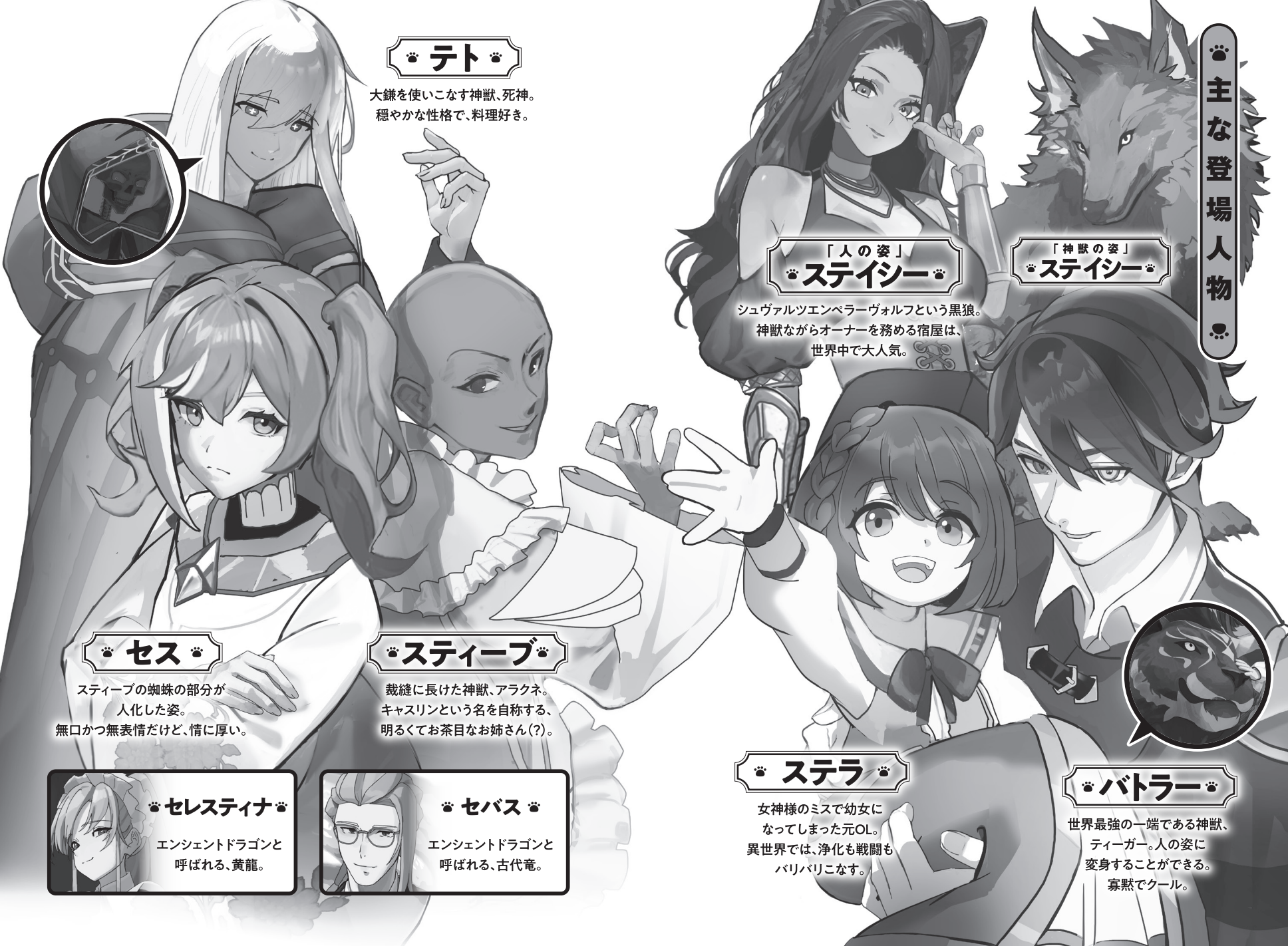
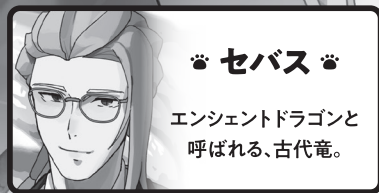
世界最強の一端である神獣、
ティーガー。人の姿に
変身することができる。
寡黙でクール。

🐾 セレスティナ 🐾

エンシェントドラゴンと
呼ばれる、黄龍。

🐾 セバス 🐾

エンシェントドラゴンと
呼ばれる、古代竜。



やりたかったことをやった結果 ↓ とほほ(泣)

私の名前はステラ。転生者の三歳児である。

自分の前世については、もう臍げにしか思い出せない。

家族や親族、友人知人の名前や顔、声はすでに忘れてしまったけれど、培った知識や彼らと過ごした記憶はたしかに残っている。

そんな私の前世は、アラフォーに片足を突っ込んだ、仕事が恋人の女だった。

とある母子を命懸けで救ったところ、エジプト神話の女神バステト様に功績を称えられた私。

バステト様に誘われて彼女が管理する異世界——神々はガイア、人間たちはメアデイスと呼ぶ星に転生することになった。

その際に女神様から、「ガイアに棲む神獣や彼らの棲み処などに生じた穢れを祓い、世界を浄化して巡ってほしい」と依頼され、快諾。

旅に必要な魔法とスキルを授かり、いざ転生したものの……想定外の場所に下ろされてしまう。

私が目覚めたのは、魔の森と呼ばれる場所の中でも、もっとも広大で魔素が濃い場所である、正

式名称・死の森という、超々危険なところだったのだ！

神様、聞いてないよ！

途方に暮れていた私は、バステト様の神獣で、ティガーという黒虎のような魔物のバトラーさんに保護された。その後は彼と一緒に死の森を北に向かって進みつつ、さまざまな神獣に出会った。デスサイズを持った死神のテトさん。

アラクネのステイブさん。彼は女性しか生まれなはずのアラクネでありながら、男性体で生まれた特異体で、キャスリン……もとい、キャシーという名を自称している。

エンシェントドラゴンの夫婦である、古代竜のセバスさんと、黄龍のセレスさんことセレスティナさん。

この二人に出会うまでの道のりは長かった。地球では伝説となっているジズ——ズーだの、ベヒーモスだの、魔樹であるトレントの王様だのに遭遇してしまったからだ。

バトラーさん、テトさん、キャシーさんと行動していた私は、ベヒーモス戦でとどめを任せられ、バツチリ討伐。

【ドラゴンスレイヤー】という、およそ幼児が持つていてはいけない称号を得てしまった。

そこからも旅はトラブル続き。

ドラゴン夫婦が旅の仲間に加わり、私たちはテトさんが案内するのを忘れていた場所に向かう。

西洋竜の姿になったセバスさんに乗って、移動した先にあったもの。

それこそが、ガイアの世界樹だったんだが……。

なんと超々ヤバイことに、穢れまみれになっていたのだ！

しかも、セバスさんとセレスさんの親族二名が穢れに侵され、ユグドラシルを守るように飛んでいた。

穢れを祓うのは私の仕事だけれど、これを浄化したら確実に【超越者】になってしまう。

本来なら999でカンストするはずのレベルが、経験値を溜めまくった結果、1000を超えてしまう者が得る称号——【超越者】。絶対に三歳児が持つべきものではない。

そうわかっているけども、私は自分が引き受けたことだからと世界樹とドラゴン二体の浄化を果たす。そして、案の定【超越者】の称号がついてしまった。

こればかりはどうにもならないと諦めた私たちは、死の森を抜けるために移動を再開。

異世界に来て約二ヶ月。ついに私は、町の防壁が遠くに見える地に降り立ったのだ。



東洋竜の姿になったセレスさんの背中から降りる前に、彼女の鬘とセバスさんの羽毛を堪能し

だけど、雪がほとんど降らないか、降っても一センチしか積もらないような場所に住んでいた私からすると、一度でいいから雪に埋もれてみたいのだ。

アメリカに出国留学したときには積もることもあったが、さすがにいい歳をした大人が、町の中にある公園や路地で雪にダイブするのは、恥ずかしすぎる。

スキー場なら自然にできたんだろうけれど、近くになかったんだよね。仕事が忙しすぎて、スキーに行く時間すらなかったし。

しかし、今は立派な三歳児。中身が三十五歳だろうと、見た目は三歳児。

雪に埋もれても、恥ずかしくないと思う！

そんなことを考えていると、テトさんが「あとでやらせてあげるよ」と言ってくれたので頷く。やったね！

くふくふと笑いつつ、ふと、うしろを見る。……テトさんが歩いてきた道に、足跡がない。

あれ？ と思い、今度は前を歩いているセバスさんとバトラーさん、横にいるキャシーさんとセレスさんを見ると、これまた足跡がない。

普通に考えたらホラーだ。

「……どうなってるの？」

「ん？ ああ、足跡が見つからないのが不思議かい？」

「はい」

「普通に歩いてるだけだよ」

「……………そ、そうですか」

テトさんの含みのある言葉に、それしか言えん。

ここは異世界、彼らは神獣

人間の常識に当てはめて考えてはいけない。

遠い目をしつつ周囲を見渡す。

雪に紛れ、遠くにうつつすらと壁が見える。城壁……いや、城じゃないから防壁か。

とても高いのは、魔物除けや盗賊・夜盗除けのためだろうか。

周囲は平原だけれど、遠目に林か小さな森のような木々が密集しているところがあるのがわかる。

そんな木々や平原も、今は真っ白だ。

木々なんて樹氷のようになってるんだぜ？ 太陽の光があつたなら、今頃はダイヤモンドダストが見られたかもしれない。

トが見られたかもしれない。

ダイヤモンドダストなんて、写真やテレビの映像でしか見たことがない。ぜひ生で見てみたいな。

どうやら雪国のようだから、そのうち見られそうだけれど。

平原ではときどき、白や水色のなにかが動いている。

「テトさん、あそこで動いているのはなんですか？」
 「ん？ ああ、あれは魔物だね。白いののは冬毛のホーンラビットかな。あと、あの薄い青色は、フォレストウルフの冬の体毛だね」

「ほえ〜」

ファンタジーでよく見る定番の魔物だね！ バトラーさんと出会ってすぐ、遭遇したなあ。
 この世界に来て、約二ヶ月ちょい。

今は十月の中旬か下旬ごろなんだったって。

カレンダーがないから詳しい月日はわからないみたい。……カレンダーもあるのか。つうか、この世界の北国の降雪はずいぶん早いね！

この世界に来た当初はまだ夏毛だったのかな。どっちも薄い灰色か茶色の毛皮だった気がする。ただ、毎日が濃いうえに、死の森の中心部や最深部にいた強い魔物との戦闘や穢れの浄化、蛍光ピンクな害虫の印象が強烈すぎた。

正直、インパクトある出来事に上書きされて、旅の初めのころのことはあまり覚えていないのよ。魔物はもとをただせば動物だから、換毛期があるのかな。

生え替わりの時期とか、抜け毛がすごそうだなあなんて思いながら魔物を見ていたら、ホーンラビットがフォレストウルフに捕まった。

魔物特有の青い血が飛び散る。

おおう……魔物同士でも捕食するのか。弱肉強食の世界なら当たり前か。

神獣たちは魔物が襲ってこないなら放置する気のように、気にすることなくサクサクと進んでいく。

歩くペースが速いから、遠くに見えていた防壁がだいぶ大きくなってきた。

町のかかり手前ではあるが、樹木が群がる林のような一帯が見える。

そこを迂回して町へ向かうのかと思いきや、ここで休憩するそうだ。

……林ではなく、魔の森だったが。

セバスさんがテトさんに視線を移す。

「テト、ログハウスを出してください」

「わかった。ステラ、昼食になるまで、雪に埋もれていてもいいよ」

「やったー！」

テトさんの許可が出たので、下ろしてもらおう。

まずは正面から。ジャンプ一発、私は雪に飛び込んだ。

「——っ！」

気持ちいいーっ！



どこのゴールドメダリストで水泳選手みたいな叫びを雪の中に吐き出すと、なんとか起き上がって立つ。

二、三步離れた場所に移動して、今度は背中から倒れるようにドーン！
ポフッと音がしたあとで左右を見たら、しっかりと二十センチほど埋まってた！

「きゃはははははっ！」

「[[[[ステラ……]]]]」

「楽しいでしゅー！」

滑舌がよくなった今でもたまうに囁むけど、ここは無視！

呆気にとられていた神獣たちは、いつしか残念な子を見るような目をしている。

知らんがな！ 私は念願叶って楽しいぞ！

もう一度ジャンプして正面から雪に埋もれ、今度はゴロゴロと横に転がった。

雪が顔に当たって冷たいけれど、ふわふわのふかふかだ。

ガイアは地球と違って空気中や雲に有害物質がないため、このまま食べたって平気。

口に含んでみるとなかなか美味しい。溶かして飲んだらどんな味だろうと想像すると、夢が膨らむ。

行動が体の年齢に引っぱられてる感は否めないが、私が楽しければいいんだよ！

何度か埋まったりゴロゴロしたりしていると、ひょいっと体が浮いた。

「ん？」

「ステラ、はしゃぎすぎだ」

「にゃーにゃー!？」

首を捻^ねって上を見たら、黒虎になったバトラーさんが私を唾^{くわ}えていた。目が呆^{あき}れている。

「……私は猫^{ねこ}か？ 仔猫^{こねこ}扱いか!？」

周囲を見回せば、雪遊びに夢中になっているうちにログハウスからかなり離れていた。

おそろくだけれどバトラーさん一人が見守り役として残り、他の神獣でご飯の用意でもしているんだろう。

「セレスが呼びに来た。そろそろ昼食の時間になるそうだ。行くぞ」

「はい……」

やっぱりご飯ですか。でもって、私を唾^{くわ}えたまま移動ですか。

ぶらーんぶらーんと手足と頭が揺^ゆれるが、酔^ようようなこともなく。

仔猫^{こねこ}ってこんな気持ちなのかな？なんて考えていたら、あつという間にログハウスに戻ってきた。

玄関を開けるとセレスさんが待ち構^{くま}えていて、バスタオルを広げている。

「かなり遠くまで行ったのね。楽しかった？」

「はい！ 楽しかったでしゅー!」

「それはよかったわ。けれど、まずはご飯の前に、お風呂に入って温まりましょう」

「う……、あ、あい」

笑顔がこえーよ、セレスさん！ 真っ黒なオーラが見える、凄^{すげ}みのある微笑^{ほほえ}みだよ！

セレスさんが私をバスタオルにくるんで抱^{かか}え上げると、バトラーさんも人型^{にんがた}になって家の中に入ってきた。

バトラーさんと別れた私はそのままセレスさんにお風呂場へ連れていかれた。一緒に浴槽^{ゆきそう}に浸^ひかる。

ボンキュッボンでスタイル拔群^{はつぐん}、ほどよく引き締まった肢^{しな}体^{たい}は筋肉か。

充分大きいとはいえバステト様のお胸よりは小さいな、と失礼なことを考えていると、つつい視線がセレスさんの巨乳^{きょにち}に吸^すい寄せられる。

「願^{ねが}いして触^ふらせてもらったら、マシユマロのように柔らかい。」

「ステラちゃんは甘^{あま}えん坊^{ぼく}さんねえ」

「転生前の自分や母のお胸様よりも大きいので、どんな感触かたしかめたくて」

「ふふっ！ ありがとう」

楽しそうなセレスさんに、私も楽しくなる。

いかん、気を抜くと目の前にあるお胸様を見てしまう。知っているか、デカイ乳は湯舟ゆぶねに浮かぶことを。

セレスさんと話をしつつ、私は温まるまでゆっくりと湯舟に浸かった。お風呂から上がったあとは着替えてからお昼ご飯。

あゝ……そういえば、漬つけ込んでいたくらの存在を忘れてたなあ。

食事をしながら夕飯はいくらしようと伝えると、神獣たちは「楽しみにしている」と言ってくれた。

よし、頑張るぞ！

ご飯を食べると、幼児の体はすぐに眠くなってくる。さっきまで動いていたもんね。起きたら今後の予定を聞かねばと思いつながら、暖炉だんろの前でいつの間にか眠っていた。

眠っているうちに、バトラーさんが私の雪遊びのことを話したらしい。

起きた途端、雪の中でゴロゴロした件について、「戦えないんだから、ログハウスを離れたら危ないでしょ！」と、神獣たち全員に叱しかられました！

バトラーさんが近くにいたから魔物たちが寄ってこなかっただけで、もし私だけだったら確実にフォレストウルフに襲襲われていたとのこと。

まあ、今回は前もって許可を得ていたから誰かが残ってくれていた。なので、「黙だまって遠くに行くな」と言われました。

ですよー！

もちろん、一人で勝手な行動をしないと誓ちかわされました。まあ、するつもりもないが。だって怖いもん、神獣たちが。特にセレスさんが。

まだ生きてみたいです。

そんなわけで説教は短時間で終わり、これからの予定を聞いたのだが。

「セレスさん。私たち、ここに泊とまるんですか？」

「ええ。当分雪がやみそうにないし、町の門も閉まっているからね」

「それは……」

門が閉まっているなら中に入れなもんね。

テトさんによると、私が寝ている間に、彼は町へ偵察ていさつに行ったんだって。そのときはまだ門が開いていたという。

ところが門番と話している途中で、冒険者が慌あわてて駆け込んできたらしい。どうしたのかと門番が聞く前に、雪の中を移動していた隊商たいしょうが到着。

その人たちの話をまとめると、彼らは盗賊と魔物に次々と襲撃しゅうげきされたそうだ。

護衛をしていた冒険者たちが盗賊を返り討ちにしたものの、血の臭いに釣られたのか、フォレストウルフの群れとブラウンベア数体までやってきてしまった。

どっちもお腹を空かせていたらしく、餌認定されてしまったという。

このままだと商品も人も危ないからと、隊商は脱出を選択。

切り捨てた盗賊たちを身代わりの餌にすることで町まで逃げ延びたみたい。

仕方がないとはいえ……やっぱり、地球より命が軽い世界なのかなと考えたり。

「フォレストウルフはまだわかる。だが、この時期にブラウンベア？ おかしくないか？」

「バトラーの言うとおりだよ。セバスはなにか知ってる？」

「この国は、数年前……特に、今年の春からずっと気候が安定していませんでしたからね。もしかしたら、作物が育たなかったのかもかもしれません」

「気候が変動すると、山も森も実りが悪いもの。しかも不作となると……人間たちが、山や森から食料を奪ってきている可能性もあるわね」

「ああ、そういうことか」

バトラーさん、テトさん、セバスさん、セレスさんが今いる国の状況を分析している。

なんとも胸が痛むというか、物騒というか。

日本にいたときも、気温や天候の不順で作物が育たないとか、育っても実入りがよくないなんて

話はニュースで聞いた。

台風や豪雨、地震などの災害が起こると、きちんと育っていた作物も収穫できなくなってしまう。

それと同じで、この国もなにかしらの要因で不作となり、足りない分を山や森から採取してきたんだろう。

森に棲む動物や魔物のことを考慮せず、無遠慮に採ってしまったんじゃないか。

今まで神獣たちが教えてくれた話を聞く限り、ガイアは地球のような大量生産の技術がなく、あちこちへ簡単に移動する手段も限られている。

地球では旬を過ぎた野菜や果物、魚が食べられたけれど、この世界はそうじゃないのだ。

ガイアには冷凍保存や長期保存できるような冷凍庫、冷蔵庫の類がない。

ただ、時間が経過しない魔法の鞆があるのはとても便利。

その一方でビニールハウスや温室のように温度管理をして作物を育てるという発想がないため、特定の時期を過ぎたら次の季節まで食べられない食材なんてものがあるらしい。

もちろん、保存食用に乾燥させた野菜や果物があるし、塩漬け肉もある。それでも、作る量や技術的な問題で、長期保存ができるようなものはごくわずかだそう。

保存食は農耕ができない冬に備えたり、冒険者の携帯食にしたりするために作るんだから、収穫の多い秋に作業するのが鉄板なんだけれど……。

不作となると保存食どころか、税として納める作物を用意することさえ、難しくなるらしい。備蓄は国や領主がやることであって、町や村、個人の単位ではまずやらない。

しかも、この国のように冬場は家にこもらざるを得ない豪雪地帯ばかりだそう。

国や領主が備蓄を放出せず食料がなくなると、民は山や森に出かける。とはいえ、そちらも天候不順の影響を受けているから、どうあがいても食料は足りない。

そうすると隊商を組んだり個人で移動していたりする商人を襲って積み荷を奪う、盗賊に成り果てるしかないそう。

また、人間たちが食料を採り尽くした森を離れ、動物や魔物たちが平地や畑に出てくる。

魔狼や魔兎、魔鹿はともかく、動物・魔物に限らず熊種は冬眠する。

そのために、晩秋はとにかく食べて栄養を蓄えないといけないのに、食料がない。

ないから冬でも彷徨い、動物や魔物の他に人間たちを襲って食べる羽目になる。

一度でも人間の味を覚えてしまった魔物はいっそう狂暴になり、人間だけを狙うようになってしまふ。

それが、ブラウンベアがこんな時期に隊商を襲った理由だろうと、神獣たちが溜息交じりに教えてくれた。

怖っ！

こうした背景で、町はブラウンベアが討伐されるか別の場所に移動するまで、門を閉めることにしたらしい。

隊商を襲撃した盗賊の残党が襲ってこないとも限らないので、そちらを警戒するためでもあるそう。

うだ。

私はテトさんに聞いてみる。

「討伐隊は出ないんですか？」

「出すと聞いたよ。僕は町で調味料を買ってからこちらに戻ってきたんだけど、帰り際、自警団の騎士や兵士と、冒険者が門に集まっているのを見たから。もう出発しているかもね」

「騎士も兵士も冒険者も、盗賊や魔物の相手は慣れているからな。ブラウンベアのレベルと討伐隊の人数にもよるが、人間たちが負けることはないだろう」

「そうですか」

テトさんに続いて、バトラーさんも説明してくれた。

魔物だけじゃなく、人間たちも弱肉強食。

ゲームと違ってコンティニューできないんだから、どちらか負ければそこで終わりだもんね。そりゃあ自然の脅威に対して真剣にもなるし、対処もするだろう。

長々と話をしたが、そんなわけで門が開くまではこの場所で待機。薪は隣の小さな魔の森から倒

木を拾ってくるんだとさ。

薪は溜め込んでいるとはいえ、今の人数で一冬過ぐすと足りなくなりそうだ。

きつと、町で買うわけにもいかないだろう。

薪は暖を取るだけじゃなく、料理にも使う。

どれだけあつても困らないし、需要が高まつて価格が高騰しているだろうから。

まあ、これから盗賊が押し寄せてきそうな場所になるべく行きたくないっていう理由もあるんだろかね。

ここには、犯罪者ホイホイな美少女がいるし。

同じく犯罪者ホイホイになりそうなイケメンと美女もいるし。

神獣である大人たちからすれば超々楽な移動距離であり、人間たちにとってはちとキツイ場所にあるここに留まるのが最適だと考えたのだろう。

だって、彼らは雪の上を歩けるけれど、町にいる人間は雪をかき分けながら出かけるしかないんだから。

地球のようにかんじきやスキー板があるならともかく、雪用ブーツ程度では歩くのが大変な積雪量だもの。

……もしかしたらかんじきはあるかもしれないけれど、神獣たちからそんな話は聞いていない。

なので、今はないと仮定しておく。

薪を拾うついでに近くのイグドラシルの状況も見に行くらいし。穢れていたら浄化しないとイケないしね。

おっと、滞在期間を聞いておかねば。

「セバスさん、いつまでここにいることになりますか？」

「そうですね……、とりあえず今日と明日はこちらに留まるでしょう。あとは門が開くタイミング次第ですが……。テト、町の様子はどうでした？」

「僕感覚だと、町の中に定住するのはやめたほうがいいね。盗賊と魔物の件もあるけれど、食料自体が行きわたっていないようで気になった」

「やはり、不作の影響は出ていますか？」

「ああ。町の話や噂を聞く限り、国と領主が動いたらしいけどね。全国的な規模での不作だから、どうにもならない。それに、今は商人たちが食料品の値段を不当に吊り上げているみたいだね」

「『ああ……』」

神獣たちに交じって、私も溜息をついたよ。

いるよね、食材を買い漁って溜め込み、儲けようとわざと値段を上げる商人が。

商人なら独自のルートで他国から商品を買いつけることができるけれど、定住している住民たちはそうじゃない。

近くの商人から買うしかないから、本当に必要なものは高くても買わざるを得ないわけで……。領主にバレたら、のちのち困るのは商人のほうだと思っただけだなあ。

「交代で様子を見に行こう。町がダメそうなら、いつそのログハウスで一冬を越すか、東か西の国に行くかしたほうがいいね」

「そうですね。そこはわたくしたち全員で見極めてから、結論を出しましょう」

テトさんの提案に、セバスさんが頷く。

すると、バトラーさんがテトさんに視線を向けた。

「危ないから、ステラは町に連れていかないぞ」

「連れていくにしても、様子を確認してからだね」

「そこはわかっています。私もみなさんと離れたくないですし」

年齢的に、一人つきりで生きていけるとも思えないしね！

そんなことを言えば、神獣たちは微笑みながら私の頭を撫でてくれた。くふ。

外はまだ大粒の雪が降っているが、第二弾の偵察として、バトラーさんとセレスさんが様子を見に行ってくるそうだ。

その内容を踏まえたうえで、明日も午前中から神獣たちが交代で変装して、町に入るんだって。この世界のスパイスや、この時期に採れる食材を教えてほしいというど、お土産に買ってきてくれるというので頷いた。

初めてのイブドリシル

ログハウスを出て、バトラーさんとセレスさんを見送る。

ちなみに、彼らが町へ行っている間、私はテトさんとキャシーさん、セバスさんと一緒に魔の森へ行くことになっている。

町に入るにあたって、バトラーさんは見た目を壮年に変えた。

装いは剣士の冒険者スタイルで、セレスさんはテトさんのようなローブをかぶり、杖を持った魔法使いスタイルだ。

もちろん二人とも、両合羽のように水や雪を弾く外套を羽織っている。

こちらの外套とセレスさんのローブは、キャシーさんの下半身である蜘蛛さんの糸を使ったもの。キャシーさんのお手製である。

「では、いってきますわ」

「ついでに素材をいくつか売ってくる」

「二気をつけて」

「いでら〜」

バトラーさんたちは冒険者ギルドのタグを持っているようで、それを使って町の中に入り、情報を集めてくる気らしい。

バトラーさんがSSランク冒険者なのは知っていたけれど、まさかセレスさんもギルドタグを持つていたとは。

ちなみに、セレスさんはSランクだそう。

ランクアップ試験が面倒で、Sランクから上げていないんだってさ。これはセバスさんも同様で、彼もまたSランク保持者らしい。

ドラゴン夫婦の実力的に、本当はSSランクが適正らしいが……いいのかよ、それで。

恐るべし、神獣様。

いつてらっしゃいと二人を見送り、全員でログハウスに戻る。これから、魔の森へ行くための準備をするのだ。

私は防寒対策としてバステ様がくださった、内側がもこもこで、防寒と撥水・防水加工がされ

たブーツを履く。

このブーツは軍靴か登山靴もかくやな、超頑丈な代物なのである。うーん……もしかしたら、安全靴のつもりで入れてくださったのかもしれない。

あとは下着の上に白い半袖Tシャツと、その上に淡いグリーン地に赤やピンク、黄色など、小花柄の刺繍がされたチュニックを着用。

続けて裏起毛の黒い革スボンとサバトラ柄の毛糸の靴下をはき、最後にブルーライオンのダツフルコートを羽織った。

どれも防寒や耐寒の【付与】がなされているので、寒さ対策はバッチリさ！

「ステラちゃん、このお帽子と手袋をしたら、行きましょう」

「は〜い」

一目で手編みだとわかる、猫耳がついたサバトラ柄の帽子と手袋をキャシーさんにはめてもらう。私は彼と手を繋いでログハウスを出た。

今回はバトラーさんとセレスさんがいつ帰ってくるかわからない。

だから、二人と私たちにしか見えない結界を張ってログハウスは出したまま森へ出かけるんだって。

そんな説明を受けている間にセバスさんが結界を張り終える。

キャシーさんに抱き上げられ、みんなで森へ出発。そのまま歩くと、私の体では雪に埋まっちゃうからね！

神獣三人が、警戒しながら魔の森の奥へ向かっていく。

先頭はセバスさんで次が私とキャシーさん、殿はテトさんだ。

しんしんと降る雪華は、たまに吹きつける風によって舞い上がり、枯れた木々に付着してゆく。なんとも幻想的。

まばらだった落葉樹が少しずつ増え、常緑樹と混在していく森。

霧氷と樹氷が交じり合い、常緑樹はとうとうスノーモンスターへ変貌していた。

「綺麗でしゅねえ」

おおう、囁んだ！

「ふふっ、そうね。まるで、雪の魔物みたいよね」

「たしかに」

「前世の私が暮らしていた国の、有名な豪雪地帯にも、同じものがありましたよ。そこでは大きく育った樹氷のことを、スノーモンスターと呼んでいました」

スノーモンスターは雪の怪物——この世界だと雪の魔物という意味だと教えると、三人とも「なるほど、言えて妙だ」と口を揃え、頷いていた。

ひとつとして同じ形がないのよね、スノーモンスターって。

仕事で真冬の蔵王に行ったとき、たまたま時間が取れて見に行った記憶がある。その景色がとても綺麗で幻想的だったことをなんとなく思い出した。

そんな話をしていると、雪に埋もれかけている倒木や枯れ木を発見。どうやら雪の重みで倒れたり折れたりしたらしい。

あとで乾燥させようと、軽く水分だけ飛ばし、【アイテムボックス】にしまう神獣たち。私は枯れ枝を見つけては、近くににいる誰かに手渡した。

そうこうしながら進むうちに、そこだけぽつかりと雪が積もっていないところへ出た。

目の前には天辺の樹冠にだけうっすらと雪が積もった世界樹の子樹が、世界樹と同じように淡いエメラルドグリーンの光を放出している。光はゆっくりと地上へ降り注ぎ、消えていった。

イグドラシルとはいえど、それなりにデカイ樹だ。

大人四人か五人が両手を広げてやっと囲い込めるくらいの太さだから、直径二、三メートル前後かな？

そう考えると、直径五十メートルを軽く超えていたであろうユグドラシルは、アホみたいにデカすぎる。

それはともかく。

状況を分析するセバスさん、キャシーさんに、テトさんが頷いた。

「そうだね、恨まれていたと思うよ？ 人間と魔物の骨だし、これ」

「魔物の骨？ ということはテイマーですか？」

「違うよ」

なんか新しい職業が出てきたぞ？ ほく、この世界にはテイマーもいるのか。

念のためにどんな職業か聞いたら、三種類のテイマーがいるらしい。

ひとつめは飼育師。これは主に牧場で働いている人のこと。

ふたつめは調教師。小型で温厚な魔物や動物を飼いたい人へ販売したり、人間に危害を加えたりしないように調教する人のこと。別名、ブリーダー。

牧場にいる馬も、彼らが調教するという。競走馬の調教師みたい、なんて感想を持ったよ。

そして最後は、使役師。ファンタジー小説などでよくみる、魔物を使役する人のこと。

ただし、魔物と心を通わせて一緒に戦う人もいれば、無理やり言うことを聞かせる、悪質な人もいる。

セバスさんは、この亡骸が後者のタイプではないかと疑ったようだ。

無理やり使役すると、魔物によつては怒り心頭で自らを従わせようとした人を殺すそう。

そんな話をしながら、セバスさんとキャシーさん、テトさんが骨を回収して一箇所に集めていく。

そして、魔法を使って一気に燃やした。青白く、高温だと窺える炎が立ち上る。

テトさんは、死神という種族ゆえの特性で、過去視——死者の過去やどういった事情で亡くなったのか視ることができるみたい。

始まったテトさんの話に、みんなで耳を傾ける。

「ここにあった骨は、人間が五体、魔物が十体。人間は全員男で、魔物はディア系とベア系の色違いが各三頭、残りはグレイハウンドとレッドハウンドが各二体ずつ。どの魔物も上位種だった」

青白い炎を見ながら、痛ましげな顔をするテトさん。

五人の一族は商人と護衛。商人は違法な手段を用いて商売をしていた、いわゆる悪徳商人だった。商品は相場より低く買い、相場より高く売るといふ、まさに悪徳商法だ。

取引先が「買取価格が低すぎて売れない」と言うとき口八丁手八丁で言葉巧みに騙して品物を巻き上げ、「高くして支払えない」と語る顧客は殺したり、家族を奴隷として売り払ったりする。

そんなことをしていれば、当事者やその親類縁者から恨まれるのは当然のことだ。

彼らの憎悪が穢れとなり、生前のうちから商人にまとわりついてきたという。

一緒にいる魔物も、依頼の産物。貴族から「生きて捕獲しろ」という無理難題を押しつけられ、それを輸送している最中だったらしい。

依頼主にももらった魔道具を使って捕まえたものの、その魔道具はお世辞にも性能がいいとはいえ

ない代物だった。

途中で拘束が解けて魔道具を破壊され、商人たちは怒り心頭な魔物と戦闘になる。挙げ句、両者とも怪我による出血多量で死亡。

これがほんの十数年前の話だというのだから驚きだ。どれだけ恨まれるようなことをしたんだろう？

魔物からも恨まれた五人は、生前の穢れも相まって、とうとうアンデッドになった直後に、私が放った【ライニグング】を浴び、成仏したらしい。合掌。

タイミングがいいのか悪いのかは知らんが、地面を覆うほどの靄を放っていたんだから、かなりの人数——百人はくだらないだろう人たちから恨まれていたんだなど、つい遠い目になってしまう。

まあ、話を聞く限り、因果応報である。

神獣たちしてみれば、「知らんがな」「ざ ま あ !」で終わる話だ。

改めて、弱肉強食なせいとか、やっぱりこの世界は命が軽いと感ずる。これは人間にも魔物にも言えることだ。

とはいえ、まともに、そして真面目に精一杯生きている人がいるし、魔物に立ち向かう冒険者や騎士、兵士といった職業の人もいることが、せめてもの救いか。

やがて炎が消え、灰だけが残された。

セバスさん、そしてテトさんとキャシーさんが祈る——黙祷を捧げるように目をつむって手を組むと、灰になった骨が雪と混じって舞い上がり、キラキラと輝いて天に昇ってゆく。

神獣特有の【ライニグング】なのか、あるいは純粋な祈りなのかはわからないけれど、とても綺麗な光景だ。

私も両手を合わせ、どうか心穏やかに成仏してくださいと、日本式の祈りを捧げる。

テトさんの話を聞いたあとなので、本音をぶつちやければ、「ざ ま あ ! 次は悪さすんじゃないぞー」である。

心穏やかには言ったが、魂を管理しているであろう死者を司る神が、彼らの生前の所業をどう判断するかは知らん。

祈りを捧げ終わり、イグドラシル周辺の状態を確認。私の仕事である穢れの浄化はバッチリ終わっている。

周辺も問題なしと判断したセバスさんの提案で、来た道とは違うルートを通ってログハウスがある場所に戻るようになった。

テクテクと歩いていくと、雪が降り積もっているというのに、咲き誇る花の群生地を発見。

見つけたのは、どれも薬だの毒だの液体魔法薬の材料だになる植物ばかり。

最初に鑑定したのは、ピンクと黄色、オレンジのランタンキュラス。他の地域では白と紫、青な

どもあるらしい。

どれも皮膚を爛れさせたり、心臓を止めるほどの毒性を持つていたり危険極まりないが、癒し草などと混ぜることで薬になるんだそう。あれだ。毒と薬は紙一重的なやつ。

次に発見したのは、淡い緑と白、薄紫とピンクに近い紫のクリスマスローズ。他にも濃い紫と白に紫の縁取りをしているものなど、色はかなり豊富みたい。

このクリスマスローズもどちらかといえば毒に分類され、嘔吐や腹痛、下痢やけいれんを起こす。胃腸炎系で同じ症状の、感染症に近い毒だ。

ただし、墮胎薬や下剤、強心剤などの薬にもなることから、用途は広範囲に亘る、優れたもの。

そして最後に見つけたのは、赤、赤と白の斑模様、白、淡いピンク、薄緑の椿。

この椿は観賞用、食用、薬用に分類されるものの三種類だそう。

斑と赤は観賞用、白と淡いピンクが食用、緑が薬用だつて。

種に関しては観賞用だろうと食用だろうと薬用だろうと、食用油として重宝されているんだとか。特に薬用は、育毛剤や髪を保湿用香油の原材料のひとつだそうな。

……この世界にもいるんだね、育毛剤が必要な人。

明後日の方向に感想を抱きつつ、どれも薬草や毒草として優秀なので採取。苗として根っこごと抜いた。

椿に至ってはバトラーさんが欲しがらるだろうからと、色ごとに三株ずつ引っこ抜いていたよ、テトさんが。

喜々として、けれど丁寧に椿を抜くテトさん。

そんな彼を見て、セバスさんとキャシーさんが呆れた顔をし、私は生ぬるい視線を送ったと言っておく。

倒木や枯れ枝を拾いながら帰路につき、無事にログハウスに到着。

みんな中で入ったが、バトラーさんとセレスさんはまだ戻ってきていなかった。

テトさんが暖炉の中へ薪を数本入れて炎を大きくし、肌寒くなっていた室内を暖め始める。寝室として使っている部屋にはすでに暖炉が焚かれており、部屋はとても暖かい。

仕事が早いテトさん、さすが！

風邪をひかないように魔法で体や服を綺麗にし、外出用の服から室内着に着替えた。

LDKになっっている部屋へ移動して暖炉の前にあるラグの上に座ると、すかさずテトさんが水とミルクティーを渡してくれた。外から帰ってきたばかりなので、飲みやすいようにミルクティーの温度はぬるめだ。

まずは水分補給がてら水を一気飲みし、ミルクティーをゆっくり味わう。

すると、私の隣にセバスさんがやってきて、ラグの上に優雅に座って私を見る。どうやら話があるみたい。

「町で金銭を用意してくるように伝えてあります。なので、バトラーが帰ってきたら、実際にお金を見せてもらいましょう」

「はい！」

元氣よくお返事をする。

いよいよこの世界のお金が見られるのか。硬貨だと聞いたけれど、どれくらいの大きさなのか？ 見るのが今から楽しみ！

このままぬくぬくとバトラーさんたちの帰りを待っていてもいいんだけど、キャシーさんは「機織りをする」と言って作業部屋にこもったし、テトさんは「ログハウスの増築をしたいから、木材を削ってくる」と出かけていった。

みんなが働いていると、私もなにかしないといけない気になってくる。

「セバスさん、一緒にお菓子を作りませんか？」

「おや。それは楽しそうですね。わたくしにも教えていただけますか？」

「もちろんでしゅ！」

おおう、また囁んだ！

ちよくちよく語尾というか『す』を囁むの、どうにかならんかなあ。ちよつと恥ずかしいのよ。

それは横に置いて、お菓子作りだ。

野宮やみやをしているときのように、私の背でも届く位置に竈かまどや調理台があるなら一人でも問題ない。

テトさんがログハウスを充実させるまでは屋外で調理することが多く、そうやってきたわけだし、けれど今は真冬。外に出て料理なんてできないから、キッチンを使うときは必ず神獣の誰かと一緒にしなければならぬというルールだ。

なにせ三歳児だからね。椅子いすを使ったとしても、テトさんが使うオープンには、微妙に届かないんだよ。

なので、お菓子にしるご飯にしる、料理をする場合は必ず神獣の誰かが必要なのだ。

てなわけで、セバスさんと一緒にキッチンに行き、食べたいものがあるか聞いてみる。

そうじゃないとレシピを組み立てて、セバスさんに材料を伝えられないからね。

「ふむ……このキッチンにある材料、魔道具で作れるお菓子にしましょうか」

「そうですね」

「では、まず材料を見てみましょう」

「はい！」

左手をあげて返事をし、キッチンにある材料を調べる。

小麦粉と強力粉、重曹ととうきびスターチ、アマンドを粉にしたアマンドプードルと、同じくバターから作った片栗粉。これらは死の森で採れた植物や野菜を、テトさんが【錬金術】や【料理人】スキルで粉にした品だ。私の話を聞き、それからバステト様にいただいた食品を見たテトさんが興味を持って、試作したものだっけたりする。

あとは砂糖や塩などの調味料に、森で採取して乾燥させたハーブ。それぞれ瓶詰めされて、棚に並んでいる。

ちなみに、残念ながらキッチン内に醤油と味噌はない。私の魔法の鞆——黒猫の鞆には入っていないだけだね。

バステト様からの贈り物の中に、システムキッチンがあっただが。その延長で冷蔵庫と冷凍庫の話をしたとき、テトさんが作り上げたものがある。

その冷蔵庫を開けてみると、卵と牛乳、バターとヨーグルト、生クリームといった乳製品をはじめ、果物と野菜、肉やベーコンなどが見つかった。

つか、卵と乳製品なんていつ冷蔵庫に入れたんだ？ 私の記憶にないぞ？

セバスさんに質問したら、私が寝ている間に行った町でテトさんが買ってきたものだそう。

防壁がある町から半日ほど離れた場所に牧場があり、そこで加工や販売をしているんだって。

「なるほどー」

「町にいる商人が仕入れていたのでしょうか。バイソンは比較のおとなしい魔物ですし」

「ほえー。それは見てみたいです」

「時間があれば行ってみましょうか。この国の遙か西にある国は、ここよりも畜産が盛んなのですよ」

「そうなんですな」

そんな国があるんだね。牛——バイソンも魔物だとは思わなかった！

なんでも、この国で扱っている牛は魔物が多いだけで、西にあるその国は動物の牛と魔牛が半々らしい。しいて言えば、動物のほうが多いんだとか。

全部魔物じゃないのは、畜産業が動物の種の保存も兼ねているからなんだってさ。

魔素が濃い場所にいると、動物は魔物化しやすい。そうではない場所であれば、動物のままだという。

同じ牛でも動物と魔物では強さも狂暴さも格段に違う。また、動物のほうが魔狼や魔熊などに狙われやすいらしい。

なので、そういった魔素が少ない地域で動物の牛や鶏、豚や羊などを飼育している。

反対に魔素が濃い場所では、魔物化したものの中でも、比較的温厚な種を飼っているんだとき。

牛だけじゃなく、鶏や豚、羊の魔物もいるのか……。まあ、山羊の魔物がいるんだから当然か。

てつきり、この世界の豚肉はボアか、ファンタジー小説にありがちなオークかと思つてた（笑）。それはともかく。

材料自体はお菓子を作るにはもつてこいのものばかりなので、焼き菓子とプリン、時間があればコンポートを作ってみることに。焼き型は私が提供する。

焼き菓子はクッキー、パウンドケーキ、マドレーヌ、マカロン、フラン。

パウンドケーキはバナナを入れたものとブルーベリーを入れたもの、プレーン味の三種類にする予定。

プリンを作り方を変えて、それぞれオープンと蒸し器でやってみよう。

コンポートはペルシクとペーレ、エベル。

コンポートは待ち時間に作れればいいかな、つてセバスさんと打ち合わせをしておく。

てなわけで、レッツ・クッキン！

最初は一番時間がかかるパウンドケーキから。

まずは材料を計量して混ぜ合わせ、三等分する。続けて、味変用のバナナをフォークで潰した。

その後、潰したバナナを混ぜた生地、ブルーベリーをそのまま入れた生地を型に入れ、天板へ。

こちらのオープン、魔道具としての機能か、あるいはテトさんがなにか細工をしているのか、温度と時間を設定してスイッチを押すと、なんと一分も経たずに設定温度まで温まるのだ！

魔道具って便利だな♪

ちなみに、私の黒猫の鞆に入っている魔道具のオープンも、同じような性能だったりする。

……神様ご謙製だからなのか、温度と時間を設定してスイッチを押したら、一瞬で設定温度まで温つたのはまいった。

パウンドケーキをオープンに入れたら、マドレーヌに取りかかる。次にクッキーとマカロン、フランとプリンの順で作製。

フランはたとえるなら、プリンのような焼き菓子だ。

プリンに比べてアレンジの幅が広い、カスタードを使った料理のこと。

甘いカスタードをタルト生地に流し込んでお菓子にしたり、野菜やチーズ、ベーコンを加えて茶碗蒸しのような惣菜にしたりできる。

今回は、ついでにプリンの生地も用意した。先にこちらをオープンと蒸し器に入れたあと、フランを作る。

カスタード作りってレンジがあれば簡単なんだけど……今日のお菓子作りは、このキッチンにある魔道具で作るといふ縛りなので、黒猫の鞆に入っているオープンレンジは使えない。

だから材料を鍋で炊いてひたすら練り、カスタードにしたよ——セバスさんが。セバスさんがカスタードを覗いてしみじみと言う。

「綺麗な黄色になるものですね」

「でしょー？ パンに挟んでもいいし、シュークリームというお菓子の中に入れても美味しいですよ」

「それはそれは……。いずれ作り方を教えていただけますか？」

「もちろんでしゅ！」

テトさんと一緒に作ってもいいね、なんてセバスさんと話しつつ、フランもオーブンに入れた。

しばらくして、「できたよー♪」とばかりに次々とオーブンが音を鳴らし、パウンドケーキをはじめとするお菓子の完成を知らせてきた。

「おおう、いっぺんにやりすぎた！」

「だけど、そこは有能な執事のセバスさん。慌てず騒がず、ぱぱっとオーブンや蒸し器からお菓子を Ausgegeben してくれだよ。」

「……まるで分身しているかのような残像が見えた気がしたけれど、気ニシナイ。」

粗熱が取れるまで待つてから、焼き菓子類を型から外して冷まし、プリンは冷蔵庫ヘイン。

「マカロンにはテトさんお手製のジャムと、生クリームとチーズを混ぜ合わせたチーズクリームを挟んだ。」

「美味しそう〜！」

他の神獣たちが戻ってこないの、焼き上がりの時間潰しにコンポートも作ってしまおう。材料を鍋で煮て、冷めたところをセバスさんが作った瓶に液体ごと移し、冷蔵庫へ。

「もちろん、瓶は魔法で殺菌済みさ！」

あとは明日のためにパイ生地をセバスさんと作り、冷蔵庫で寝かせておいた。

そんなことをしているうちに、バトラーさんとセレスさんが帰宅。テトさんとキャシーさんもダイニングに来たので、私の主導で晩ご飯の支度を始める。

まずは米を研いで炊飯器へ入れ、スイッチオン。

続いて昆布とカツオ節で混合出汁を取り、わかめとパヤムの澄まし汁を作る。

炊けたご飯を木製の小さな深皿に入れ、海苔を刻んで針海苔にし、上に散らす。

今日は味が違ういくらを食べ比べる予定なので、お皿の数は人数の二倍だ。

「ククミス」を斜めの薄切りにしたものと、「ラック」を薄く削ぎ切りにしたものをご飯に載せる。それぞれの深皿に二種類のいくら漬けを分けて盛りつけた。

残しておいた混合出汁を使って塩味と砂糖味の出汁巻き玉子を作り、パヤムのおひたしも用意。

「おかわり用に炊飯器はテーブルの上へ置いてもらい、余った分の二種類のいくら漬けも皿に取り分けて添える。」

最後に、黒猫の鞆に入っていたスモークサーモン——もとい、スモークラックスと残ったラックスライスとククミス、出汁巻き卵やおひたしを食卓へ。

二種類のいくらを載せたご飯と澄まし汁、私提供の緑茶をカップに注いでみんなの前に置いたら、いただきます！

まずは味噌味のいくらから。

んんん！日本のものよりも一回り大きい粒のいくらは、味噌の旨みを吸って素材の味をいっそ引き立てている。

味噌に漬けたことよって固まった粒は、噛むととろりとした食感だ。

とても美味しい！

魚卵を食べたことがないと言っていたバターさんとテトさん、キャシーさんとセバスさんとセレスさんは、スプーンでちよつとだけいくらをすくい、こわごわと目を瞑って口に運ぶ。

数回咀嚼して動きを止めているので、何かかと思ったら神獣たちは目をカッと見開き、頬を薄く染めて一気に食べ始めた。私は思わず啾然とする。

そうしていくら丼を食べ終わった面々は。

「「「美味しい！ おかわり！」」」

「先に醤油味も味わってからです。おかわりするのは、どちらかにしてください」

「「「あっ、ハイ」」」

とても美味しかったようだ。

私はいえ、スモークラックスや出汁巻き卵、おひたしを箸休めとして食べていた。

味噌味のいくら丼を半分ほど食べ進めたあと、澄まし汁を一口飲んでから、今度は醤油味をぱく。

「んんん！ これこれこれ！」

いくらが違うからか、母の味とはまた違うけれど、これはこれで美味しい！

とはいえ、祖母直伝の味噌漬けも、母に教わった醤油漬けも、調味液はそのままの味を再現できたようにホツとした。

味噌味とは違う柔らかめのトロつとしたいくらが醤油がマッチしていて、ご飯が進む！

これはこれで大人たちも気に入ったようで、爆食した（笑）。

いつもならなにかしら話をしながら食卓を囲むんだけど、ご飯が美味しいからか私も含めてみんな無言。

出した料理は、おかわり用も含めて綺麗さっぱりなくなりました！

ご馳走様でした！

ご飯を食べたあとは、魔の森の様子と町の様子の報告会。

先に魔の森でのことを話す。……はずだったんだが、現在の私は、バトラーさんとセレスさんに
両側から抱きつかれ、「ただいま」攻撃をされている。

二人が帰ってきたときの私は、セバスさんと一緒に料理してたからね。たしかに、「お帰りな
さい」をしていないわ。

バトラーさんたちは「ただいま」ができなくて、ウズウズしていたらしい。
過保護もここに極まりりつてか？

まあ、それはともかく。

二人が満足するまで愛でられ、みんなで暖炉の前に集まって報告開始。

神獣たちはワインとエール、町で買ってきたという蜂蜜酒と林檎酒を飲みつつ、食べごろになっ
たイカの塩辛やいかトンビを肴にちびちびと。

私はセレスさんが搾ってくれたオレンジジュースとマカロンで晩酌に参加。

くそう……早く酒が飲める年齢になりたい。美味しそうなんだよ、蜂蜜酒と林檎酒。

地球産のどう違うのか、飲み比べてみたいし……って、本題はそうじゃない！

まずは私たちが行った魔の森の状況を説明すると、バトラーさんとセレスさんは無言でお怒りに
なった。

バトラーさんは怒りを逃がすように溜息をついたあと、町の様子を教えてくれた。

二人が町に着くと、門は開いていたそうだ。

事情を知らないフリをして門番に話を聞くと、冒険者と兵士や騎士たちが、魔物の討伐と盗賊の
残党狩りを終えて帰ってきたばかりだったという。

門番からは「危険がなくなったと判断し、門を開けた」と聞かされたらしい。

おお、無事に討伐されたのならよかった！

町の中に入ったらすぐに冒険者ギルドに行つて、不必要な素材を売つたらいいんだが。

その中にフォレストウルフとホーンラビット、ミノタウルの肉が大量にあったもんだから、ギ
ルド側はびっくりからの狂喜乱舞。肉はすぐに商業ギルドに卸されたという。

つうか、道中でミノタウルスなんていたっけ？ 私、遭遇したっけ？

………記憶にない。

何度も言うが、毎日が濃すぎて、どんな魔物と遭遇したかなんていちいち覚えてないやい。

がっかりだよ、私。ダメダメじゃん、私。

で、ギルドで換金したあとは町の様子を見つつ散策し、屋台で買い食いしながら情報を得たとの
こと。

最終的には露店で調味料と乾燥野菜と乾燥キノコ、ドライフルーツと乳製品を買つて町を出たら
しい。